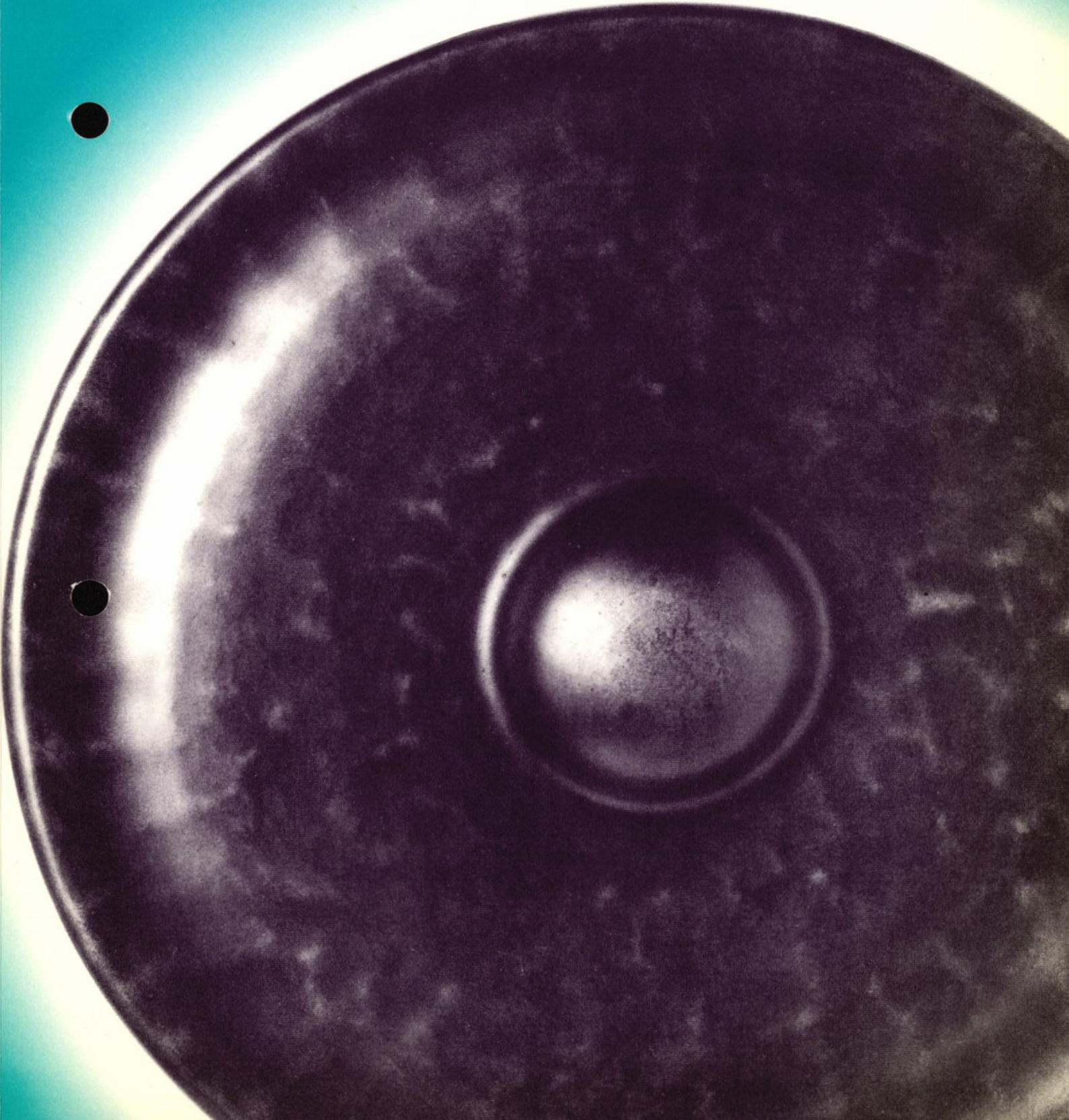


ROTARY CLUB OF **KANAZAWA-NORTH**

1995年9月28日 第544号

金澤北ロータリークラブ



私の終戦の思い出 ～ロータリアンの義務と責任～

大村 精二



「耐え難きを耐え 忍び難きを忍び 以て……」

雑音交じりのラジオから、戦争終結の詔書が流れてきたのは、昭和20年8月15日の正午でした。あれから半世紀。マスコミは終戦50年を記念した様々な特別企画を組んでいます。当時“銃後”にいた私にも、決して忘れ去ることのできない幾つかの思い出があります。

私が生まれたのは昭和6年9月15日、満州事変が勃発する3日前のことでした。それから日本は軍国化へひた走り、当時の新聞のトップ見出しは常に戦争、戦争でした。そして昭和16年12月8日。その日は確か、霰の降る非常に寒い日でしたが、ラジオが突然、「帝国陸海軍は本八日未明、西太平洋上において米英軍と戦闘状態に入れり」と告げ、軍艦マーチが高らかに鳴り響いていたのを記憶しています。日本は、もはや引き返せない道を選んだのです。

旧制中学へ入る年、中学校は一中、二中、三中に分かれる小学区制となり、瓢箪町校下に住む私は三中へ通うことになりました。ところがいざ入学すると、3年生以上は学徒動員によって軍需工場へ駆り出されており、先生も少なく上級生がやむなく代理教員を務めるという状態でした。

当時の私たちは、軍人となることに何の疑いもなく生きていました。そこで私は、三中の授業を終えたあと兼六園間近にある偕行社へ行き、一中、二中の生徒たちと一緒に陸軍幼年学校へ入学するための勉強に励みました。いま思うと大変愚かなことですが、唯一の救いは、その時に知り合った友人が現在の私にとって大切な財産となったことでしょうか。私たちの服装は、地下足袋にゲートル巻、戦闘帽、そして肩には焼夷弾から身を守るための防空頭巾をかけたというものでした。その姿で私たちは、米軍の爆撃によって起きる延焼を防ぐために駅前の木造建築を壊しにいたり、金沢駅に届いた戦没者の遺骨を東別院まで粛々と運びました。

しかし最も苦しかったことは、食糧難に尽きるでしょう。食べ盛り、育ち盛りの身にとって、それは何よりも辛く堪えませんでした。唯一のタンパク源と言えば金石で獲れたイワシ。三中のグラウンドはいつしかカボチャ畑になり、スキー場はサツマイモ畑に変わりました。それでも私たちは雑草を食べ、飢えを凌がなければなりません。あのひもじい思いは、決して忘れるものではありません。三中へ七尾線でやってくる農家の子息たちが真っ白なご飯を食べているのを、私は何度かなく思っ見ていたでしょうか。

戦争も末期になると、米軍のB29が北陸へも飛来してきました。金沢上空を旋回して富山へ向かい、焼夷弾を落とす。しばらくすると卯辰山の向こうが赤赤と燃えあがる恐怖に、私たちができる抵抗といえば、ただひたすらに防空壕を掘ることでした。

終戦の2日前、町会長をしていた父のもとに、ある情報が入りました。どうも日本は負けたらしい。ポツダム宣言を受諾することになりそうだ。

そして昭和20年の8月15日、正午。

あの玉音放送が、雑音とともに流れてきたのです。

戦後50年を生き抜いて、私はいま、どうしても次の世代に伝えておきたいことがあります。

ひとつは、広島・長崎に落とされた原子爆弾のこと。当時は新型爆弾と呼ばれていた原爆は、14兆カロリー、3千度の能力を持ち、広島では20万人もの死者を出しました。これは誰がどう弁明しようとも、国際法に違反する許しがたき兵器です。しかも米軍はこの原爆に「リトル・ボーイ」という実にふざけた名前をつけ、当時のトルーマン大統領は何のためらいもなく投下の指示を出した

のです。

日本が唯一の被爆国であることは広く知られています。しかし原爆投下を行使した国は意外と知られていない事実があります。アメリカから来た交換学生が広島の実験資料館を訪れ、「こんなひどいことをしたのはどこの国ですか」と質問しました。我々にとってはどうにもやりきれない話です。これはどのようなことがあっても風化させてはならない大問題です。また、アメリカのスミソニアン博物館で原爆資料展を開催しようとした際、米軍の退役将校たちは猛反対をしました。なぜでしょう。それは彼らが、原爆とはいかに非人道的で恐ろしいものであるかを知っていたからに他なりません。

先日、ワシントンポスト紙に平岡・広島市長が意見広告を掲載しました。主旨は、「原爆投下を決してアメリカに謝って欲しいから言うのではない。原爆がもたらす悲惨さを世界の人々に知ってもらいたい。そのためにもまず広島を知ってください」というものでした。また同様に、長崎市長も今年、核兵器廃絶元年を宣言しています。これも至極当然のことと思います。

さて、もうひとつはソ連による日本人のシベリア抑留問題についてです。

ご存知のように、日本は日露戦争以後、ソ連との間に不可侵条約を結びました。しかしソ連は、昭和20年8月になり日本の敗戦が濃厚になった途端、一方的に条約を破棄し宣戦布告をしてきました。そして終戦になり、満州、朝鮮にいた日本人男性約60万人を極寒のシベリアへ連行。満足に食糧も与えず強制労働につかせ、その1割の6万人を無惨にも死に至らしめました。

まさに日本が負けんとする間際の宣戦布告。これは我々にとって、火事場泥棒に等しいことです。ソ連とはそういう国なのです。したがって私は、いまでも未解決の北方領土問題に関して、その返還には非常に否定的な見方をせざるを得ないと考えています。

原爆とシベリア。このふたつの重大な出来事は、常に私たちの脳裏に刻み込んでおき、決して風化させてはならないことだと思っています。

さて、現在世界へ目を向けますと、相変わらず宗教的、民族的な紛争が世界各地で起きています。この10年間だけでも、戦争もしくは戦争が原因で亡くなった人は、200万人を越えるとも言われています。私たち日本人はいま、世界は平和だと思っていますが、現状は目を覆うべき悲劇であふれています。世界は決して平和ではないのです。

私たちが属している国際ロータリーは、世界平和のためにどんな貢献をしているのでしょうか。毎週毎週「望むは世界の久遠の平和」と唱えながら、我々は果たしてどれだけのことをしているのでしょうか。ほんの小手先の奉仕活動で自分自身をごまかしてはいないでしょうか。私は現在の、そしてこれからのロータリー活動について、いま一度それぞれが自分たちの使命について考え直す時期にきているのではないかと内省しています。

私の意見は、かなりタカ派的だと思います。しかし私は、あえて皆様のご批判をいただきながら、以上のことを今後も伝えていきたいと考えています。



